

## 英語教育における比較文化論への展望（Ⅱ）

武 本 昌 三

前稿（Ⅰ）に引続き、英語のクラスで使用してきたテキストの中から、若干の文例をえらんで、それらの文化的背景を日本文化と対比させながら考察していく。<sup>1)</sup> こういう作業の積み重ねによって、英語の背景にある欧米文化の全体的な輪郭を浮彫りにさせることができれば、と考えているが、そのためには、広範囲な検討をもう少し続けなければならないかもしれない。

前稿では、日本人とヨーロッパ人の生活環境の相違にポイントをおき、その流れの中で書き進めていったが、本稿では、順序にはあまりこだわらず、気ままに書いていくことにしたい。

### 9. ものの見方の相違

Westerners tend to look at life, at the world, as though sitting in a helicopter above it, while the Japanese swim in the actual flow of events.

—*The Japan Experience (II)*

表現が適切であるかどうかは別にして、この文で、ヨーロッパ人（西欧人の意味で用いる。以下同じ）が *helicopter* に乗ったような高い所からものを見

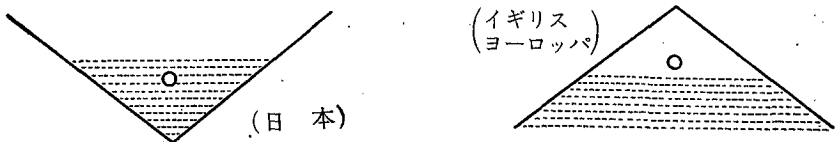
原稿受領日 1980年4月30日

- 1) 文例は、引用を含めて次の4種類のテキストからとった。Ronald V. Bell: *The Japan Experience I* および *II*, 研究社., Joyce McDonnell: *The Japanese People*, 弓書房., Vance E. Johnson: *Exploring English*, 金星堂., Peter Milward: *Between England and Japan*, 成美堂。

なお、本稿の一部は、別に稿をおこした“英語教育における比較文化論的アプローチ（Ⅱ）”（日本英語教育学会機関誌『英語教育展望』第3巻第2号、1980年6月発行予定）と重複する。

ているというのは、前稿 (I-5) で述べた「平坦で開放的な、大きな門」の生活環境モデルをもとにして考えると理解しやすい。ひろい範囲を自由に移動しながら、多くの異民族や変った風俗習慣とひんぱんに接触してきたヨーロッパ人は、高い所から、いわば、広角レンズを通してものを見ているのである。そのために、視野はひろいが、身のまわりのこまかいものを、個別的、具体的に把握する力には欠け、対象のとらえ方が、いきおい、巨視的、類型的にならざるをえないこともすでに述べた。イギリス人が、「大きな自然」の中で、ひろびろとした田園風景やドーバー海峡の絶壁の遠景、大海原の雄大さなどに美を感じるといわれるのもこのためであろう<sup>2)</sup>。街のたたずまいにしても、ヨーロッパの場合は一般に、高い視点から全体として眺めると美しい。ひろい視野の下での美観を保つためには、建物の高さを一定にしたり、建築様式にも規制を加えたりしてまで調和と統一に気をくばろうとする。それでいて、一歩建物の中に入れば、身のまわりの生活空間は案外陰気で薄暗く、無趣味無細工であることが珍らしくはないのである。

日本人の生活環境モデルは、「閉鎖的な小さな三角形」であったが、このような環境の中では、人間は自然に密着した形で生きていくことにならざるをえない。当然、視野は狭くなるが、そのかわりに鋭敏となり、繊細な感情と直観力が発達して、一木一草から花、小鳥に至るまで、身近な「小さな自然」にこころを惹かれるようになった。これを視点と視野の相違としてヨーロッパ人と対比させると、たとえば、次のように図示できるであろう。(○印は視点、点線部分は視界)



日本人の眼はこのように、視点が低いゆえにおのずから、身近なもの、小さなものに向けられていて、遠いもの、大きなものには関心が及ばない。そのた

2) Nakamura, Wiener; *Ways of Thinking of Eastern Peoples*, The Univ.

めに街の姿も、ヨーロッパとは違って、全体として眺めればまとまりがなく、雑然として貧弱であるが、その反面、家の中は小ぎれいに整頓されて、情緒豊かであることが多い。<sup>3)</sup>「日本の天才は小さなものにおいて完璧に達する」という B. H. チェンバレンの言葉や、「日本の芸術家は小さなものにおいては偉大であるが、偉大なものにおいては小さい」という A. イーストの批評も、このような日本人の、低い視点からのものの見方の一面をあらわしたものと見えるであろう。本文の“The Japanese swim in the actual flow of events.”も同様で、日本人が自然の中に融けこみ、生活環境と渾然一体となっているさまを、このような形で表現したものにすぎない。日本人は、まさに、生活環境の流れの中に身を浸して泳いでいるのであって、それゆえに、流れが変れば日本人もまた新しい流れに即応して変っていくことになる。このことは日本人の変り身の早さをもたらし、さらにその延長線の上で、極端に走りやすい性癖や、熱しやすくさめやすい傾向を生み出す条件ともなった。<sup>4)</sup>

Press of Hawaii, 1974, p. 356.

- 3) テキストにも次のような日本の都市美についての批評があるが、ここに感じられるのも欧米人の視点である。

“...Kyoto, for instance, is a miserably ugly city, as a city, with many beautiful things in it ..... I think most visitors to kyoto must feel absolutely horrified when they first set foot in it because they've heard that it is Japan's Florence or Athens, and yet it isn't Florence or Athens at all, because it has no public beauty..... I've argued that there are parts of Tokyo that are becoming very attractive, and a sense of public beauty is increasing. The landscaping that one finds in parts of Marunouchi and elsewhere now is among the first examples of this.” *The Japan Experience II*

なお、日本人が身のまわりのものを美的に、巧みに処理する能力があることについて、三枝博音は次のように述べている。「自然の複雑さ、もしくはその複雑さを巧みに取り入れることから生れる自然交渉の複雑さというものが日本人には顕著である。日本人は実生活上で身の回りの品物を巧みに処理し、而も巧みに美術的に取扱うのである。まことに日本人は右のような実生活の態度では、精神的であり、天才的である。」『日本の思想文化』中央公論社、1978, pp. 36-37.

- 4) 和辻哲郎は、モンスーン的な「受容性」が日本人においてはきわめて特殊な形態になってあらわれることを指摘して次のように述べている。「四季おりおりの季節の変化が著しいように、日本の人間の受容性は調子の早い移り変りを要求する。だからそれは大陸的な落ちつきを持たないとともに、はなはだしく活発であり敏感である。活発敏感であるがゆえに疲れやすく持久性を持たない」。『風土』岩波書店、1976, p. 136.

イギリス人を含めてヨーロッパ人は、常に対象を自己の視点から引離して高い所から見ているので、ものごとを客観的に、かつ関係的に認識しやすい。ことばの上では、日本語にはない形容詞の比較級の形式が英語などに見られるのはそのためであろう。一方、このような対象のとらえ方は、ヨーロッパ人に二元論的な発想をうながす契機にもなった。一般にヨーロッパ人が、精神と物体、魂と肉体、善と悪、個人と社会、人間と自然等々、二つの対立したものとして考える傾向が強いのも、対立を好まず、一元論的な発想に慣れている日本人とは対照的である。

日本人の場合は、すでに見てきたように、自然の中に埋没し、環境と一体になってしまっているので、「流れ」の中から自分を引離し、まわりの対象を客体化して離れた所から見るのが不得手である。“Getting off the bus, I found myself facing the most enchanting fairy palace.” というような再帰の用法が、日本語にはない理由も、多分そのためであろう<sup>5)</sup>。また日本人が、客観的科学的なものの見方になじまず、ヨーロッパ人に比べて、抽象的理論構成や分析的思考能力の面で後れをとりやすいといわれるのも、日本人のこのような、流れの中に浸りきって身をまかせている状態とは無関係ではないにちがいない。

## 10. ヨーロッパの民主主義

Democracy is a way of dealing with human affairs that has been developed by the countries in the northern tradition of Europe, and in fact it works mainly in the countries in the Anglo-Saxon and Scandinavian traditions.

—*The Japan Experience (II)*

これはイタリアの文化人類学者、F. Maraini の見解であるが、democracy

5) このようなものの方と日英語の相違については、武本昌三「日英語の相違とその自然的社会的背景」『人文研究』第56輯を参照されたい。

はヨーロッパの北部地域で発達し、アングロ・サクソンやスカンジナビアの伝統のある国々で主に機能している、と述べていることは注目に値する。ヨーロッパでも何故北部なのかということは興味ある問題で、意見も分れるところであろうが、ここでは、今まで述べてきた生活環境と生存条件の相違を中心にして考えてみることにしたい。

democracy そのものは、いうまでもなくギリシャ語の *dēmokratīā* [*dēmos* *people*+*krateîn* (*v.*) *rule*] からきた語で、*OED* では第一義として次のように説明されている。

Government by the people; that form of government in which the sovereign power resides in the people as a whole, and is exercised either directly by them (as in the small republics of antiquity) or by officers elected by them. In modern use often more vaguely denoting a social state in which all have equal rights, without hereditary or arbitrary differences of rank or privilege.

日本では昔、これを「民本主義」などと訳したこともあったが、現在では「民主主義」となって日本語の中に定着した。学生達も *democracy* の意味を聞かれれば、ほとんど機械的に「民主主義」と答えるであろう。しかし、それでは「民主主義」とは何か、と重ねて聞かれれば、答えに窮してしまうかもしれない。リンカーンの、“Government of the people, by the people, and for the people” を思い出しても、どうも本質が掴みにくいように思われるのは、元来それが借りものの思想であり、日本の風土に根ざしたものではないからであろう。上に掲げた *OED* の説明でも、日本人にとっては十分に理解を助けるものとは言い難い。<sup>6)</sup>

6) 日本人にとって、*democracy* にかわるものは、おそらく、「和」の精神であろう。「和」は *democracy* とはちがうが、明らかに一種の *democratic idea* である。土着の精神だから、当然のことながら、日本人にはわかりやすい。

日本は周囲を海で囲まれた中で、国民は日本語を話し、伝統的な日本文化を育てあげてきた日本民族に属する。そしてこの、「日本国民」、「日本語」、「日本文化」、「日本民族」の四つの要素はその範囲が完全に一致する。これに対してヨーロッパでは、国民、言語、文化、民族はそれぞれ四つの異なったものであり、それらの範囲や境界は一致していないことが決して少なくはない。これはきわめて著しい相違であって、たとえば言語を一つとってみても、日本でなら、日本語を上手にしゃべれるのは日本人で、日本語ができないのは外国人であるとみて大体間違いはない。ところがヨーロッパでは、同じ言語をしゃべっていても一つの国家にまとまっていない場合があり、逆に、同じ国家の中でも一つの言語が通用するとは限らない。ベルギーなどはその著しい例で、北部ではフランドル語、南部ではフランス語が話されているほか、Eupen, Malmedyのように、ドイツ語だけが話されている地域もある<sup>7)</sup>。日本のように、一言語一民族の自然国家とはちがって、ヨーロッパの国々は、人工的な国境線で恣意的に分割された契約国家なのである。

ヨーロッパには、すでに見てきたように、少くとも12,3世紀頃までは、生存のための食糧確保が極めて困難な風土的背景があった。この生存条件は、当然のことながら、南部よりも北部においてより厳しい。古来、ヨーロッパの侵略の歴史の大きな流れの一つが、北部からより豊かな南部へ向けてのものであったことも、この生存条件の厳しさと無関係ではなかった。本文中の、「アングロ・サクソンやスカンジナビアの伝統」というのも、あの Vikings や Angle 族, Saxon 族等のイギリス侵攻にも見られるように、ある意味では、厳しい生

7) もっと正確に言えば、この三つの言語もその使用範囲が截然と区別されているわけではない。これはヨーロッパ全体にあてはまることであるが、ヨーロッパに、ドイツ語、フランス語、オランダ語、イタリア語等が、別々の国語として厳存すると考えるのはあやまりである。実際には、ゲルマン系、ローマン系の觀念上考えられた言語の両極を共有しつつ、ちょうど原色をまぜあわせたいろいろの中間色のような形でさまざまな方言が用いられていると考えなければならない。従ってそれは、日本語というものが日本一国に通用するものとして存在するというのではまるで違った各国語ということになる。なぜなら、日本語にはいくら方言や発音のちがいがあっても、それが他の外国語に自然につながっていくという国際的関連性には全く欠けているからである。増田四郎『ヨーロッパとは何か』岩波書店、1977、p. 185 参照。

存条件の中で鍛えられた強靱な肉体と精神力による「弱肉強食」の伝統にほかならないのである。

移動が自由で異民族が入り混る平坦な土地に、恣意的な境界線を引いて、さまざまな価値観や美意識が互いにせり合うように乱立する。しかも、その底に流れるものが弱肉強食の原理であってみれば、ヨーロッパが、あくことのない自我拡張欲と、自・他対立の舞台にならざるをえないことは想像に難くないであろう。そのためにヨーロッパにおける人間関係は、家族でさえも他人的であり、親子でも兄弟でも、師弟や友人関係においても、利害の前には対立しやすく、自分以外はすべて競争相手ないしは敵対者であるという意識が強いのである。頼れるものは結局自分だけの世界であってみれば、そこから自己の権利や主張を強く前面に押し出してくるのも当然であり、またそこから、個人の人権を尊重すべきだという思想が生れて、強烈な個人主義が育っていくことになった。したがって、ヨーロッパの個人主義を育くんできた土壌は、厳しい生存競争と自・他の対立であったといつてよい。

日本は昔から豊かな食糧と平和に恵まれ、自・他の対立とは無縁であった。個人主義が日本では育たないのも、そのための根本的な土壌が日本には欠けていたからである。平和であることに慣れきった日本人の人間関係の基底にあるものは人間性に対する信頼であって、信頼があるからこそ、「他人でも家族的」になりえたのであった。しかし、それだけに、不信感が基調となったヨーロッパ人の人間関係は日本人には理解しにくい。たとえば、次のような文の意味もつい表面的なとらえ方にとどまって、ヨーロッパ人の *mentality* を理解するための大切な視点を見落してしまいがちである。

I think the Japanese are more used to crowds than we (=the English people) are; Japan's certainly a very crowded country. And they don't hate, as we do, being touched by other people.

—*The Japanese People*

日本人が人込みの中で他人に接触してもいやがらないのに、イギリス人がそうでないというのは、ここで述べられているような、人込みに慣れていないためばかりではない。ヨーロッパでは、これまで述べてきたように、自己以外の他人はすべて敵対者であるから、敵対者に体を触れられるというのは「危険」を意味するからである。したがってヨーロッパ人は、本能的に自分の身のまわりに一定の安全空間をおきたがる。その安全空間内に他人が入ってくると何となく不安になり、さらに接近してきて自分の体に触れると不快感を抑えきれないのである。

このようなヨーロッパ人が、それぞれに孤立した個体として互いに距離をおいて対立し、しかも、それぞれの権利を侵犯することなく共存していくためには、自律して生きていくための個人主義を越えた様式がどうしても必要になってくる。そうでなければ、弱肉強食の苛酷な原理が際限なくはたらいて、ついには自滅するか共倒れになるほかはない。自分の自由は他人の不自由であって他人の貧欲は自分の飢餓につながる。自からの自滅を防ぐためには結局は他人の生存をも認めねばならず、このようにして、いわば自衛策として生れた妥協の様式が *democracy* ではなかったであろうか。それゆえに *democracy* の基底には、人間敵視の不信感を秘めた厳しい孤独と自律による自己救済の願望がある筈である。このような *democracy* がヨーロッパ北部で発達したというのは、ヨーロッパ北部こそ、この「孤独」と「願望」のもっとも強い地域であったからにはほかならない。現在では逆に、もっとも進んだ社会福祉で知られているのも、それをどこよりも強く願望せざるをえなかった過去の生存条件の厳しさのなせるわざであって、あながち理由のないことではないであろう。

## 11. 男尊女卑と “ladies first”

People abroad used to give me the impression that they

- 8) これは communication の分野でも proxemics (人間の空間と接近の研究) としてとり上げられている。アメリカの人類学者、Edward T. Hall の、いわゆる silent language などがその研究対象である。The Silent Language, Doubleday & Company, Inc., 1973, pp. 162-185参照。



thought the Japanese woman was completely subservient to the male, that she was absolutely the slave of her lord and master. Now, while it is true that in public it often looks that way, even in the thirties I found that my mother-in-law, in the home, was the boss. Outside the home or in front of strangers to the family — no, she wasn't the boss.

—*The Japan Experience (I)*

日本では昔から、社会的にも家庭的にも、男性に比べて女性の地位は低いとされてきたし、男尊女卑や亭主関白というようなことばも、いわば当り前のことのように日本人には受取られてきた。だから、日本の女性は男性に対して、“completely subservient”であり、主人に仕える奴隷のようなものであると欧米人に言われても、コンプレックスを増すだけで、反駁しようとする日本人は少ないかもしれない。

この文のイギリス人の筆者は、日本人の妻の家庭を通して日本人の男女関係を観察できる立場にあり、それで妻の母親の例をあげて、家の外や他人の前では妻が夫に従属していても、家の中では逆であった、と述べているのである。もちろん、このような問題は個人差があって、一般化しているのはむづかしいが、この場合、ヨーロッパ人の視点だけから見て言っているのではないだけにそれなりの“説得力”があるといえるかもしれない。

日本の女性の社会的地位の低さをいう場合、比較の対象はたいてい欧米諸国である。たしかに欧米の国々では、概して、女性の社会進出度は高く、“ladies first”で聞こえているから、これに比べると、社会進出度が低く、依然として家庭にしばりつけられていることの多い日本の女性が、「男尊女卑」のイメージの中でとらえられがちなのも無理ではないのかもしれない。戦前でさえ、本文のような実例があったといわれても、あるいはまた、「戦後強くなったものは靴下と女」であるといわれても、日本の「男尊女卑」の伝統は、基本的には少しも変ることなく続いているように見える。しかし、欧米が女性尊重で日本が男尊女卑であると一方的にきめつけてしまうのは、おそらくあやまりで、少

くとも歴史的にさかのぼってみた場合、事實はむしろその逆であり、本来、ヨーロッパこそ男尊女卑の本場ではなかったかと思えてならないのである。

考えてみれば、ヨーロッパ文明の源泉であるギリシャ思想もヘブライ思想も男性と女性を決して同等には見てはいなかった。旧約聖書の冒頭の神話でも、神がまず土をこねて人形を作り生命をその体内に吹き入れることで（これが *inspire* の古義である）最初の人間が出来上ったのであるが、これがアダムで男性である。その伴侶となった女性のイブは、眠っているアダムの肋骨の一本を折りとって、それを人間に変えることで作られたことになっている。ここで見られる思想は明らかに男性優位であって、人間の中心は男性であり、女性はその従属物としてとらえられていた、と考えてよいであろう。

一方、ギリシャでは、たとえばプラトンの学説にこの男性優位があらわれている。この世で最初に存在した生物は人間であり、人間の中で最も完全なものが男性であるとされた。この男性のうち、臆病で不正を犯すものがあらわれてそれが退化して女性に変わり、さらにその中で、哲学を知らぬ愚かものももっと退化してさまざまな種類の動物になりはてた、というのである。<sup>9)</sup>

このような男尊女卑の伝統を引継いだヨーロッパは、少くとも中世の頃まで男性優位の思想がゆるぎなく続いていたと思われる。男が墮落してもそれは女の責任とされ、女は男に服従し、とりわけ家事、出産、子供の養育に献身するのが当然のことと考えられていた。13世紀にトマス・アキナスは、女性は「種の保存と飲食のために不可欠」であると述べ、女性は出産のためばかりではなく、夫を助けるために創られた、と断言している。夫に対して妻のとるべき態度の平均的な考え方は、一口でいうと、服従、従順、不断の注意ということにあった。<sup>10)</sup>

ヨーロッパで女性がこのように劣等視され、男性が優位であった背景には、もちろんそれなりの、ヨーロッパの社会情勢があった。女性を家畜とともに財

9) 筑波常治『米食・肉食の文明』日本放送出版協会、1977、pp. 157-158 参照。

10) 井上泰男『西欧文化の条件』講談社、1979、pp. 100-101.

産と考える家畜文化の底流があることもおそらく無関係ではないが<sup>11)</sup>、それよりも女性劣等視に大きく影響を与えたのは、女性の活躍の場が少ない戦乱の世の中であったということであろう。ヨーロッパで戦争が絶えなかったのは、前稿でも見てきたような慢性的な食糧難が主因であった。その食糧難が、穀物や家畜の略奪によって比較的容易に解決できることがますます戦争を誘発する契機になった。日本では戦争は異常であったのに、ヨーロッパではまったく逆で、平和が異常であったのである。<sup>12)</sup>

戦争が恒常的である世界の主役はいうまでもなく男性である。ジャンヌ・ダルクのような例外もないことはないが、戦乱の中では女性はほとんど逃げ惑うことしか為すすべをしらない。それどころか、しばしば、「戦利品」の対象でさえあった。昨日自分の夫や息子を殺した敵が、今日は「戦利品」としての自分の新しい夫になる、というようなことは、ヨーロッパでは決して珍らしいことではなかった。このような場合、ヨーロッパの非情な人間関係の中でも、妻としての女性は、男性にとって最も気を許せない相手であることは明らかである。女性が人間として男性と対等であり、家庭運営の役割も平等に男性と分担する、というような考え方がおこりうるはずもなく、男性は常に女性の上に

11) 家畜が財産という考え方は、家畜への依存度の少ない農耕民族の日本人にとっては理解しにくいかもしれないが、遊牧民族特有の思想である。かつて、ローマでも、共和制になってから100年もの間、交換手段は主として家畜であった。鶏、豚、羊ろば、牝牛が貨幣の役を演じていた。だから初期の貨幣にはみな家畜の絵が刻んであり、お金の意味のラテン語、ペクニアも、ペクス(家畜)という言葉からきている。Montanelli(藤沢道郎訳)『ローマの歴史』中央公論社、1978、p. 98。「女性も家畜と同じく財産」という考え方については前稿(1-6)でも述べた。

12) もっとも、ヨーロッパの戦争は、大規模なものではなく、現代用いられている意味での戦争とはいえないかもしれない。あの Viking の海賊たちでも舟一艘に乗っていたのはせいぜい35人くらいで、総勢でも1000人を越えなかったと思われるし、1066年のノルマンディ公 William のイギリス侵攻でも5000人くらいにすぎなかった。14世紀で最大の軍隊動員数は Edward 三世の Calais 攻略の際の32,000人といわれるが、通常の軍隊動員数は5000人から7000人くらいのものであった。ただ食糧難打開のための小競合はしょっちゅう起っていたから、ヨーロッパ全体がたえず一種の戦時体制にあったといってもよいであろう。V. H. H. Green; *Medieval Civilization in Western Europe*, Edward Arnold Ltd. London, 1971, pp. 237-238参照。

立つ権力者として、女性には、「服従、従順、不断の注意」を要求していたものであろう。長い年月を経ても、その名残りはいまだに、いくつかの慣習になって、現在の欧米の家庭生活の中に引継がれているように思える。

よく見ていると気がつくことだが、欧米の家庭でクリスマスの *dinner* の招待を受けたような時、ナイフをもってみんなのために七面鳥の肉を切り分けるのは、主婦ではなく、きまってその家の主人である。古来、ヨーロッパでは、肉を分け与えるということは、家族集団においても社会的集団においても、権力者の仕事であり、肉を切る刀ないしナイフは、権威の象徴であった。英語の *prince* は、もともと、支配者とか君主、王の意味で使われたのだが、これはラテン語の *primus* (=first) と *capere* (=to take) からきたことばで、「獲物の分け前を最初に取り人」の意味である。狩猟などに出て獲物を捕えた時一番いい部分はまず自分が取り、残りを家族や従者たちに分け与えたのが *prince* であったのであろう。つまり、肉切り用の刀ないしナイフをもつことは、大切な食糧の分配権を手中に納めていることになる。この伝統が現代の欧米では、男性家長のナイフとなって続いているのではないであろうか。主婦は、切り取られた肉片を皿にとって、テーブルの家族や客にまわすことはあっても、自から家長の権威を冒して、肉にナイフを入れることはない。

一方、日本のように、恒常的な平和の下に農作に従事してきた環境の中では女性の労働力が戦乱に明け暮れるヨーロッパなどより、はるかに重視されてきた。農耕が女性を中心に営まれた例もまれではない。日本の農作は重労働ではないが、間断のない手作業の連続である。そのために忙しい時は猫の手も借りたいほどになり、働らき手の不足を補うために子供達も動員されたりする。そのために女性は農作の労働力としてのみならず、働らき手の生産力としても重要であった。この出産能力と農耕民族特有の多収穫への祈願とが結びついて、アニミズム的な信仰さえおこり、日本では女性の地位は決して低くはなかったのである。

農耕民族である日本人にとっては、ヨーロッパの肉を切り分けるナイフに相当するものは、ご飯をよそう「しゃもじ」であった。しゃもじは、ヨーロッパ

におけるナイフと同じように、食糧の分配権をあらわす権威の象徴であったが、しかし、それをにぎっていたのは男性でなくて女性であり、一家の主婦であった。主婦がやがて姑となり、年老いて嫁にしゃもじを預ければ、それは事実上、家庭の統率権を嫁に委譲したことになる。ヨーロッパの場合とは対照的に日本では、女性から女性へと権威の象徴は引継がれてきたのであった。男尊女卑とか亭主関白とかいわれる中で、次のように、イギリス人を驚ろかせる例が決して稀ではないのもそのためであろう。

I suspect that some Japanese housewives are tougher than they seem, anyway. Not all of them are downtrodden. Mrs. Sato, dear soul as she is, rules her household with a rod of iron. She takes her husband's salary, unopened, and then gives him pocket-money every day! She told me this quite casually once over coffee, and when I looked surprised she said 'But it is customary.' And sometimes I've heard her scolding poor Mr. Sato quite fiercely!

—*The Japanese People*

亭主関白どころか、これでは女房関白であるが、ここでは、ナイフとしゃもじに次ぐもう一つの例として、生計のための「財布」の問題をとりあげてみたい。

夫の給料を封も切らない状態で妻が受取り、夫はその代り、日々の小遣いを妻からもらうというのは、日本では少しも珍しいことではないが、これを聞いているイギリス人の方は驚ろいていることに注目しなければならないであろう。つまり、大切な「財布」をそっくり妻に預けるような気前のよい習慣は、イギリスにも他のヨーロッパ諸国にもないのである。アメリカにもそんな習慣はない。別のテキストには次のような一文があったが、こういう文をうわべだけで読んだら、日本人はまた、コンプレックスを一つふやすことになりかねない。

Unlike the Japanese housewife, however, she does not need to be an economic genius, as family finances traditionally are handled by the husband—so the wife needs to ask the husband for shopping money in America. This means there are no “*hyakuen teishu*” in America.

—*Exploring English*

こんな文を読んでいると、アメリカには「百円亭主」なんかいない、と日本の男性を憐れんでいるようにも見えるが、憐れみを受けるべきものがいるとすれば、この場合、アメリカの主婦であるかもしれない。要するに欧米では、夫は妻を信用しないから（たとえそれが無意識のものであるにせよ）、財布を妻に預けるようなことはしないのである。“family finances traditionally are handled by the husband” というのは、先に述べたナイフの例と同じく、家庭の重要なことは権力者である男性がにぎり、女性には任さないということで、おそらく女性蔑視の名残りともみて差支えないであろう。

このように、欧米では女性は伝統的に弱きものであり、しいたげられたものであり男性に従属してきた存在であった。しかし、弱きもの、しいたげられたものであるがゆえに、やがて一方では、女性はいたわらねばならぬというモラルも芽生えてくることになる。あの中世ヨーロッパの騎士道の精神がそれである。現代の欧米の “*ladies first*” はその流れを受け継いだものであって、その意味では、“*ladies first*” は、本来、女性尊重からきたものではなく、むしろ、女性蔑視の裏返しとして起ってきたものというべきであろう。アメリカでは、特に “*ladies first*” の傾向が強いが、これは建国当初の女性が少なく、女性がいい意味でも悪い意味でも、多くの役割を期待され、男性にとって稀少価値をもっていたことが大きく影響したものと考えられる。

日本の場合は、はじめから女性尊重の思想があるはずもなかった。女性蔑視が存在しなかったからこそ、ヨーロッパなどとは違って、女性をいたわらなければならないという裏返しの感情も起ってこなかっただけのことである。欧米では夫婦でも、毎日のようにことばや口づけで愛情を表現し合わなければなら

ない。これも裏を返せば、不信を基調とした「家族でも他人」的な人間関係の中で、そうでもしなければ夫婦のきずなが保てないからで、日本人の場合に比べて、欧米の夫婦が特に仲睦まじく円満なわけでは決してないであろう。<sup>13)</sup>この欧米人の“過剰な”愛情の表現と同様に、“ladies first”の場合も、その裏にひそむ歴史的なニュアンスとしては、ことば自体の放つ甘い香りではなく、香りとは無縁の、酸い冷気を感じないわけにはいかないのである。

## 12. 寛容と残酷

In this connection, however, I feel prompted, as an Englishman, to utter a word of protest against the cruelty of the Japanese in their eating habits.....What I am referring to is the torment they wilfully inflict not on foreigners but on fishes. Here is a kind of *sashimi* called *ikezukuri*, a word which has no corresponding word in English—though “cannibalism” might perhaps come closest to it. When I first came across it the other day, “cannibalism” was in fact the word that naturally suggested itself to my mind. But then, I reflected, the cannibals at least boiled or roasted their human victims—they usually refrained from eating them raw and alive. Yet this is how the Japanese eat these poor fishes: neatly sliced in the manner of *sashimi*, not only raw but still alive and kicking.

—Between England and Japan

- 13) たとえば Roger Longley et al, *Wife Beating* によれば、アメリカの家庭の60%は実力行使を伴う夫婦喧嘩をしており、その中の10%は常時実行組である。1978年の統計ではアメリカ全体で夫婦は4,750万組であるが、この中の10%, 470万組が毎日のようにはでな喧嘩をくりひろげていることになる。また別の調査によれば、21%が定期的に配偶者を殴っているという。定期的というのは、毎日というのから年に6回(2ヶ月に1回)というのを含む数字である。警察側の資料もこれを裏づけていて、アメリカでパトロールカーがサイレンを鳴らして夫婦喧嘩の現場にかけつける回数は、年間1000万回を越えるという。板坂元『アメリカ診断』講談社1978, pp. 132-135.

魚の「生作り」がイギリス人からみれば残酷でけしからん、というわけであるが、この種の、文化の型に対する偏見は往々にして見られることなので、ここで少し掘下げて考えてみたい。

この著者の意見では、「生作り」に対応する英語はなくて、強いて探せば“cannibalism”がこれに近いという。cannibalism は西インド諸島の一部を支配していた人喰い人種のカリブ族をあらわす固有名詞、Cannibal からきているが、それから転じて、人喰いの蛮行とか、一般の野蛮を意味するようになった。つまり生作りは、野蛮な“生殺し”というわけである。こころみに和英辞典をひいてみると、「生作り」にはもちろん対応語はなく、調理法のことでは“Serving a fish whole and raw with its meat cut in slices”とだけ説明されている（研究社、『新和英大辞典』、第四版）。

人喰い人種でさえ人間を食う時は、煮たり焼いたりして生のままでは食べないのに、日本人が魚を生きたまま刺身にして食べるのは残酷だ、というような言い方には、それなりの説得力があるように見える。しかしここで気をつけなければならないのは、「残酷」の意味がヨーロッパ人と日本人とではまるで違うということである。刺身というのは、豊富で新鮮な魚と、食生活の清潔な日本人の美意識が生み出した、ヨーロッパではちょっと真似のできない日本独特の料理法だと思うが、生作りとは、いわば、その刺身の新鮮さと清潔さをじかに、客の前に提示しただけのものにすぎない。それも魚介類だからこそその生作りである。動物の肉でも刺身にできないわけではないが、しかし、その「生作り」はあり得ない。一般に日本人は、魚ぐらいならまだしも、動物を目の前で殺すようなことに対する拒絶反応は、ヨーロッパ人とは比べものにならないくらいに強いのが普通だからである。

たとえば飼犬などにしても、ヨーロッパ人なら面倒をみきれなくなったら、あっさりと殺してしまう。動物の殺し方を問題にすることがあっても、殺すこと自体は決して残酷だとは考えないのである。しかし、日本人ならそうはいかない。飼犬が大きくなりすぎたとか、しよっちゅう吠えるので近所迷惑だとか、そんな理由で捨てられる飼犬の数は、札幌だけでも一年に3千を越えるという



<sup>14)</sup>が、飼主が自から手を下して殺すような例は、おそらく一件もないに違いない。飼犬を自分で殺すほど残酷なことはないと考えるのが日本人で、いらなくなっても、誰かに拾ってもらうことを期待してこっそり捨てる。もし拾われなければ野犬になるだけだが、それでも死ぬとは限らないからそれほど残酷ではないのである。ところがヨーロッパ人にはそれがわからない。ヨーロッパ人は、飼犬を平気で殺すことができても、飼犬を野犬にすることくらい「残酷」なことはないと考える。だから、日本人は「動物愛護」の精神に欠けていると非難したりするのである。つまり、ヨーロッパ人の頭の中には、野犬のまま放置することが残酷であっても、動物の殺戮と動物愛護は矛盾することなく同居しているわけであるが、そのようなヨーロッパ独特の論理が生れるためには、それが必然にならざるをえないような社会的背景があった。

ヨーロッパ人が、古来、風土的な厳しい制約から、生存のために牧畜に大きく依存しなければならなかったのは、すでに見てきたとおりである。しかし、生きていくために牧畜に頼るということは、動物の屠殺にも慣れるということであった。問題は家畜が日本人の伝統的な動物蛋白源であった魚介類などと違って、生物学的には人間と同じ哺乳類であることである。殺せば人間と同じく赤い血が大量に流れ出る。そういう家畜の屠殺に慣れるということは、ヨーロッパ人の血に対する感覚が、血を忌み嫌う日本人とは大きくかけ離れたものにならざるをえない。しかもこの場合、見逃すことのできないのは、家畜を殺して血を見たり、血の匂いをかぐのは、専門の業者や一家の主人達だけではなく主婦や子供たちまでもそうであったということである。つまりヨーロッパ人は、家族ぐるみで家畜の死体や血を見ることに慣れているのであって、その伝統は現在でもヨーロッパの家庭料理の中にさえ残されているといつてよい。戦後しばらく、パリのある家庭に滞在した竹山道雄氏は、ヨーロッパ人の家庭料理の特異さについて次のように述べている。

……こういう家庭料理は、日本のレストランのフランス料理とは大分

14) 朝日新聞, 1980, 3. 6.

ちがう。あるときは頭で切った雄鶏の頭がそのまま出た。まるで首実験のようだった。トサカがゼラチンで滋養があるのだそうである。あるときは犢の面皮が出た。青黒くすきとおった皮に、目があいて鼻がついていた。これもゼラチン。兎の丸煮はしきりに出たが、頭が崩れて細い尖った歯がむきだしていた。いくつもの管がついて人工衛星のような形をした羊の心臓もおいしかったし、原子雲のような脳髓もわるくはなかった。

あるとき、大勢の会食で、血だらけの豚の頭がでたが、さすがにフォークをすすめかねて、私はいった。

「どうもこういうものは残酷だなあー」

一人のお嬢さんが答えた。

「あら、だって、牛や豚は人間に食べられるために神様がつくってくださったのだわ」

幾人かの御婦人たちが、その豚の頭をナイフで切り、フォークでつついていた。彼女たちはこういう点での心理的抑制はまったくもっていず私が手もとを躊躇するのをきやきやと笑っていた。

「日本人はむかしから生物を憐みました。小鳥くらいなら、頭からかじることはあるけれども」

こういって、今度は一せいに怖れといかりの叫びがあがった。

「まあ、小鳥を／あんなにやさしい可愛らしいものを食べるなんて、なんと残酷な国民でしょう！<sup>15)</sup>」

ヨーロッパ人は、このように、血なまぐさい残酷と日常的に接触しているのであるが、しかしこれを彼等自身が残酷と感じ続けるのであれば神経がもたないであろう。そこでヨーロッパ人には、食料のために動物を平気で殺しても、それを残酷だと感じないですむような冷徹な論理がどうしても必要になってくる。このようにして生れたのが、人間をはっきりと動物と区別し、人間をあらゆるものの上におくという人間の絶対的優越の思想であった。

すでに旧約聖書の「創世記」において、

神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し

15) 鯖田豊之『肉食の思想』中央公論社、1978、pp.3-4より一部再録。

男と女とに創造された。……神はいわれた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ。地のすべてのけもの、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。……（1の27,9の1,2,3）

とあるように、動物は人間と植物の中間に位置する被創造物であり、他の被創造物と同じく、人間の利用と食料のために存在することが天命であるとされている。つまり、人間が動物を屠殺し、それによって自分達が生き長らえることは「神」のみ心にかなうことであった。彼等は「神」の名において、人間と動物を峻厳に差別し、われわれの感ずる残酷を残酷でないとする論理を獲得したのである。動物の屠殺が生存のために不可欠であった彼等にとって、所詮、神とはそういう「神」でしかありえなかったにちがいない。

もっとも、この人間と動物を峻別する論理的根拠が明確に主張されるようになったのは、聖トマスのようなスコラ哲学者達によってであった。彼等はアリストテレスを援用して、動物は感覚的な覚魂を持つが、人間には靈魂があり、自決、自制、意志を持つとして両者をきびしく分離した。靈魂を持つものが神を信ずることができ、神に救済される可能性をもつ。だから動物は、この隔絶した高貴な存在である人間のために、利用され食われる以外の存在価値をもたなくなるとされてしまったのである。<sup>16)</sup>

このようにしてヨーロッパ人は、動物愛護の精神の下に、昨日まで生活の伴侶であり、子供達の仲のよい遊び友だちでもあった家畜を、今日は家族総動員

16) ここで、改めて問題になるのは、ある一つのものの見方や価値判断に対して、その文化的背景を無視したままでは軽々しく批判できないということである。家畜文化には流血の屠殺はつきものであって、それをたとえば農耕民族が、自分達の価値判断の尺度に照らして「残酷」だというのは、やはり「偏見」であるというべきであろう。

東洋史の中でも、匈奴、夷狄などは遊牧民族で、ヨーロッパ人以上に血を見ることには慣れており、なかでもジンギスカンのひきいるモンゴールは、世界史でもっとも残酷な民族としてヨーロッパ人からも「黒い悪魔」とよばれて恐れられた。遊牧民族の立場になれば、残酷であることが自分達の生活権を守る当然の手段であったともいえる。

17) 会田雄次『ヨーロッパ・ヒューマニズムの限界』新潮社、1978、p. 30 参照。

で、女、子供も手伝いながら平然と屠殺することが矛盾ではなくなった。殺すための思いやりとしては、できるだけ苦痛を与えないようにするということだけで、真赤な血が流れる情景そのものは無感情のまま平然と受けとめる。テキストの中で、“what I am referring to is the torment they wilfully inflict on fishes.”と言っているのも、“cannibalism”だと非難しているのもそのためである。<sup>18)</sup>

この人間と動物との明確な断絶の論理によって、ヨーロッパ人は、人間以下のものを殺すことには残酷を感じないですむことになったが、ここで一つ、注意しておかなければならないのは、彼等のいう「人間」とは、決して人類一般ではなく、キリスト教徒である自分達ヨーロッパ人だけに限定して考えていたことである。したがって、異教徒も「人間」ではないし、有色人種も「人間」の中には入らない。彼等は、人間と動物とを断絶させた同じ論理で、人間の中でも、キリスト教徒のヨーロッパ人とそれ以外の人間とを断絶させてしまったのである。

その一つの例は、11世紀から17世紀後半まで7回あまりくり返された十字軍であった。異教徒は人間ではないと割切ることのできた遠征軍将兵の残虐さは限にあまるものがあつた。勝利が確定したあとも、平和協定を破って、無抵抗の非戦闘員、婦女子、子供に対してまで、殺戮、略奪、暴行の限りをつくしたが、このことを伝えるヨーロッパ側の記録には、良心の呵責の一かけらも見ら

18) このような考え方は遊牧民族一般の mentality をヨーロッパ人なりに「神」を導入して合理化したもの、と考えられる。トルコ人の例も次のように全く同様の反応を示している。「友人は、ボロ車を森の小さな広場にとめ、料理道具やワインなどをおろすと、“近くの村へごちそうの材料を仕入れにいく”と走り去った。そして30分ほどのち、なんと生きている子羊をつれて戻ってきたのである。しかもその可愛い子羊を抱きながら“よく太っているだろう、丁度食べごろだ”などと平気でいう。その上、美少女の彼の妹までが、その子羊を見て“あらおいしそう!”と歓声をあげたのである。それから友人は、目隠しの布を子羊に巻き、ナイフで一氣に喉を切った。ところが日本に来るトルコ人のほとんどが、日本人の魚の食べ方、つまり活魚料理店で客の前で生きている魚を殺しその肉片を食べる心理が納得出来ないらしい。」大島直政『遊牧民族の知恵』講談社、1979、pp. 65-66.

れないことはよく知られている。<sup>19)</sup> アメリカに渡ったヨーロッパからの植民者達  
が、あまりにも多くのインディアン達を殺すので、その反動を恐れたローマ法  
王が、インディアンも人間である、とあらためて宣言したという信じ難いよう  
な話も伝わっている。<sup>20)</sup>

このような例は何も遠い昔だけのことなのではない。会田雄次氏は、第二次  
大戦中のビルマで英軍の捕虜になって使役に服した時のイギリス軍の「残酷さ」  
を、氏自身の体験からいろいろと証言しているが、その中の一つを次に引用し  
てみよう。

英軍兵舎の掃除にノックの必要なしといわれた時はどうということかわ  
からず、日本兵はそこまで信頼されているのかとうぬぼれた。ところが  
そうではないのだ。ノックされるととんでもない恰好をしている時など  
身仕度をしてから答えねばならない。捕虜やビルマ人にそんなことをす  
る必要はないからだ。イギリス人は大小の用便中でも私たちが掃除に入  
っても平気であった……

その日、私は部屋に入り掃除しようとして驚ろいた。一人の女が全裸  
で鏡の前に立って髪をすいていたからである。ドアの音にふり向いたが  
日本兵と知ると、そのまま何事もないように髪をくしけずりはじめた…  
入ってきたのがもし白人だったら、女たちはかなきり声を上げて大騒

19) たとえば、イスラム支配下のエルサレムは、アル・ハーキム時代の例外を除いて、  
キリスト教徒の巡礼に城門を開き、礼拝の自由を許していた。それなのに十字軍は  
武力で都を奪取した上、聖所を独占しようとしたばかりか、異教徒の家財を奪い、  
集団殺戮をほしいままにした。エル・アクサ寺院内では7万人以上の人々が殺され、  
モリアー山上の神殿における大虐殺では、十字軍兵士は血の池の中を脛までつかり  
ながら歩いたという。これらは一時の戦闘に興奮した一部の兵士による偶然の不幸  
事なのではない。十字軍はすでに西ヨーロッパをたつにあたって、出陣の景気づけの  
ため、いくつものユダヤ人町を襲い、無辜の住民を血祭にあげていたのである。そ  
の背後には教会関係者の意図的な煽動すらあった。橋口倫介『十字軍』岩波書店、  
1977, pp. 104-109参照。

20) 小松氏はこれのように述べている。「大航海時代のキリスト教の伝道では、ア  
メリカ原住民はカトリックの本山で“人間”とは認定されなかった。人間として認  
定すると“宣教師”を派遣せねばならず、当時は法王庁に金がなかった。ところが  
アメリカ原住民が野獣あつかいで大量虐殺され、それを知ってあわてた法王庁が  
“人間”と認定する有様であった」小松左京『日本文化の死角』講談社、1977, p.  
181.

ぎになったことと思われる。しかし、日本人だったので、彼女らはまったくその存在を無視していたのである……

彼女たちからすれば、植民地人や有色人はあきらかに「人間」ではないのである。それは家畜にひとしいものだから、それに対し人間に対するような感覚は持つ必要はないのだ。<sup>21)</sup>

魚の生作りに対する非難の検討からはじまって、ヨーロッパ人以外は人間とみなさない「残酷さ」に至るまで、つい深く入りこんでしまったようである。ヨーロッパ文化は、日本文化に比べてきわめて対照的であるために、かえってヨーロッパ人の「残酷さ」を強調する形になってしまったかもしれないが、残酷とか寛容の問題は、一方的な価値判断の基準で断定することはむづかしく、それぞれの文化の型に還元して考えていかなければならない性質のものであろう。それゆえに、生作りにせよ、飼犬にせよ、あるいは最近話題になっているクジラやイルカにせよ、「残酷さ」をはかるヨーロッパと日本の共通の尺度ははじめから存在しないことを、ヨーロッパ人も日本人も知らねばならないのかもしれない。<sup>22)</sup>

21) 会田雄次『アーン收容所』中央公論社、1978、pp. 38-42.

22) これを書いている現在、日本でイルカ紛争がおこっているが、「残酷」とは何か、をめぐっての考え方の相違が問題点であるだけに、そのあらましをつけ加えておきたい。それは長崎県壱岐島で、ブリやイカの好漁場をイルカに荒らされて困りはてた漁民がイルカを包囲して海岸に追いこみ、飼料などにするため囲い網に捕獲しておいたのが発端であった。かねてからイルカ虐殺を残酷だとして抗議していた動物愛護団体のアメリカ人、D. ケイトはこの囲い網を切ったりロープを外したりしてイルカを逃がしてしまったので逮捕され、現在、長崎地裁佐世保支部で「イルカ裁判」が続けられている。このケイト被告やその支援者たちを相手に、本多勝一氏がこころみた議論“なぜイルカなのか”（朝日新聞、1980、5、2）は、「残酷」とは何かを考える上で非常に興味深い。当然のことながら、他の動物でなくてなぜ特別にイルカを、他国の主権を侵害してまで「保護」する必要があるのか、という問いかけには、何ら説得力のある論理的な答えはえられなかった。日本までやってきてイルカの漁網を切るのはアメリカ人であって、アメリカ人以外の人間ではないところにひとつの問題があり、それはケイトをはじめ実に善意にあふれたこの運動家たちも、みずからのものの考え方の中に、アメリカの覇権主義（政治的、軍事的、宗教的、文化的）がしみこんでしまっていることには、なかなか気づかないことだと述べられている。

この問題に関連して、小川熙氏は「イルカの文化史的意義」の観点がイルカ紛争

## 13. トイレと衛生観念

Not everything's good, though, in Japanese houses. Sanitation is downright primitive for a country of so many mechanical marvels. Flush toilets are in a minority; most houses have cesspits. The vacuum-car, as it's called, is a well-known sight—and smell!

—*The Japanese People*

日本の家庭には美点が多いが、衛生面では全く原始的で、いまだに汲取便所が多く、バキューム・カーなどが走っている、という指摘である。日本でも、都会の中心部などでは下水道が整備され、現在ではほとんど水洗化されているが、周辺部や田舎では依然として汲取便所が多いから、“Flush toilets are in a minority.”はいまでも間違いではない。しかし、それが“downright primitive”かどうかは、見る視点によって意見の分れるところであろう。

日本人は欧米人の批判には弱く、汲取便所などは、いかにも「後進的」だと思えるから、このような指摘には一も二もなく同調しやすい。欧米の家庭内は、すべて清潔で衛生的であると思いきみ、さらにコンプレックスをかきたてられることになりかねないのである。しかし、日本と欧米、特にヨーロッパとの生活環境はまるで違うから、ここでも、水洗便所という一つの文化様式の発達過程は、それぞれの歴史的、社会的な背景の下で評価されなければならないで

の中には欠落している、と指摘している(朝日新聞, 1980, 4. 26)。氏によれば、イルカは水面から空中に跳び上り、また水中にもぐる運動をしばしばくり返すのでイルカは現世と彼岸とを往来することの出来る動物、ひいては死後の再生という古代的観念の象徴として、西洋美術の中で特別な意味をもってきた、という。この象徴性は、キリスト教理念の中心である復活と救済の象徴ともなり、イルカが死者の靈魂をのせて海を渡る姿で表されたり、しばしばいかりや小舟とともに描かれて、魂そのものの象徴として用いられたりしたらしい。ただ、日本人のイルカ虐殺に抗議する欧米人はそうした精神的象徴性を意識していないのが普通であり、それは、各個人の念頭からは消え去ってはいるが、長い世紀にわたって積み重ねられてきた伝統の底に沈澱する文化的成分であって、各個人には無意識に作用するものだとしているのは示唆に富む分析である。

あろう。むしろ、私自身の狭い見聞からえたおおざっぱな印象としては、家庭内部の清潔さや衛生面では、汲取便所を含めて考えてもなお、多分ドイツを除いて、日本の方が上ではあっても下ではない。少くともヨーロッパ人には、これもおおざっぱにいて、日本人よりははるかに不潔や非衛生に慣れてきた過去があった。

略奪と闘争が日常茶飯事のようにくり返されていたヨーロッパでは、18,9世紀頃まで、どこの都市も高い都市壁によって守られるのが普通であった。外敵の襲来の際はもちろん、そうでなくとも、日没後は都市壁の出入口の門は固く閉ざされ、一般に都市は市民を抱きかかえたままで、不断の警戒態勢にあったといつてよい。古くはこれを *dyn* または *dun* とよんだが、この名は英語の地名に今も残っている。たとえば、*London* は *Lyndyn* というケルト語（沼地の城の意）に由来し、これを *Londinium* という風にローマ人がラテン語化した名残りである。<sup>23)</sup>

このような都市壁は、外敵の侵入に備えたものであり、しかも防衛力が有限である以上、当然のことながら最短に抑えなければならない。そのために街はできるだけ小さく立体化する必要があった。だからヨーロッパでは都市の内部はどこも過密化せざるをえなかったのである。人口がふえて過密状態に耐えられなくなったら、外側にひとまわり大きな都市壁を築いて、古い方はこわした。古い都市であればあるほど、同じことがくり返され、都市は多かれ少なかれ、同心円的な拡大を続けることになる。パリの場合であれば、ローマ時代以来19世紀に至るまで、都市壁を作り直した回数は6回に及んだ。1840年から1845年にかけて作られたのが最後の都市壁で、それがこわされて現在のような

23) 今井登志喜『英国社会史』(上)、東京大学出版会、1971、p. 10.

なお今日、イギリスの地名で語尾に *-caster*, *-chester*, *-cester* がつくのも、城壁で囲まれたローマの兵営町の名残りである。*-caster* はラテン語の *castra* (城) から出たもので、*-chester*, *-cester* は *-caster* の転じたものである。(Lancaster, Doncaster, Ancaster, Manchester, Winchester, Rochester, Colchester, Chichester, Dorchester, Leicestershire, Gloucester, Worcester, Cirencester), 同書, p. 14.



都市壁のないパリの姿になったのは、20世紀に入ってからのことである。<sup>24)</sup>

このようにヨーロッパの都市生活は、都市壁の中の立体的生活であったわけだが、このことは市民の生活様式の上にさまざまな影響を与えることになった。まず上下水道の整備が衛生上特に必要になる。ヨーロッパの上下水道の発達が日本などに比べて進んでいるのはそのためだが、しかしそれは、どこでもスムーズに整備されたわけではなかった。パリやロンドンのような大都市ではセヌ川やテムズ川がそろそろ飲用に適さなくなった12,3世紀には、ある程度の水道工事も進められてはいたが、いづれも、高地に水源を求めて地形の起伏を利用した自然落下式で、各戸給水など思いもよらなかった。まがりなりにも水車を動力にして、水道の送水に圧力をかけたしたのは、ロンドンが1582年、パリが1608年のことである。それでも、各戸給水はまだまだ無理であった。<sup>25)</sup> そのため水不足との闘いは、常にヨーロッパでは深刻であり、飲用水にもこと欠くことが決して珍らしくはなかったのである。

18世紀の作法の本の中には「毎日顔を洗うことは健康上も美容上もよくない」と書いたものもあったという。<sup>26)</sup> 前にも述べたように、ヨーロッパ人が一般に、風呂に入ることが少なく、今日でさえホテルなどでもバス付きでないのが多いのも、このような水不足と無関係ではないであろう。食物なども、17世紀にフォークの使用が一般化するまでは、汚ない手で口に運んだ。<sup>27)</sup> このように身体の清潔にすらかまっておれない状況では、家の中の不潔さは推して知るべしである。

さて、ここでトイレの問題に戻るが、ヨーロッパでは、少くとも18世紀頃までは、まともなトイレはなかったといってよいだろう。1738年にホガースがえがいた「ロンドンの夜」という絵には、道路に沿って建てられた4,5階建のアパートの窓から、屎尿が道路に投捨てられる状況が写し出されている。1階はともかく、2階、3階、4階などの住民は、昼といわず夜といわず、もっぱら

24) 鯖田豊之『文明の条件』講談社、1979、pp. 63-64参照。

25) 鯖田豊之、ibid., p. 71.

26) 鯖田豊之、ibid., p. 72.

27) 講座・比較文化第3巻『西ヨーロッパと日本人』研究社、1976、p. 276.

室内の便器を使用し、日没後ともなれば、その中味を下の街路へ捨てる習慣があったのである。人口の過密が一段とひどくなった16世紀から18世紀までのパリやロンドンでは、当り前に行なわれていたことであった。このような場合、街路に向って、《Gardez l'eau!》(水に注意!)と大声で叫び、通行人に警告するのが一般的なならわしであったという。なかには避けきれずに、頭から尿尿をあびせられることも珍らしくはなかったらしい。<sup>28)</sup>

しかも窓から投捨てられたのは尿尿類だけではなかった。室内のごみでも当然のように投捨てられたから、街そのものが不潔のかたまりで、たとえば、パリの悪臭のあまりのひどさにフィリップ尊厳王(在位1180—1223)は気を失ったほどだと伝えられている。<sup>29)</sup>16世紀以降、ヨーロッパ人がアルコールに香料をとかして香水を愛用するようになったのも、臭気消しの方策としてであった。太陽王ルイ14世が、ベルサイユ宮殿の造営を思いたった理由の一つも、パリの臭気にあたえきれなくなったためといわれているくらいだから、パリの臭気はよほどひどいものであったらしい。工事がまだ未完成の1682年に早くも移転してしまっただが、その宮殿の中にも、トイレは存在しなかったことはよく知られている事実である。<sup>30)</sup>

現在でもヨーロッパの住宅の四分の一は100年以上も昔の建物であるという。そういう昔の石造りのアパートの壁に穴をあけてパイプを通し、水洗トイレの設備をするのが容易でないことは想像に難くない。だから、たとえばパリではトイレがあればその水洗化率はたしかに100パーセントであるが、肝心のそのトイレのない家が半分近くもあるのだという。<sup>31)</sup>残りの家は旧態依然として便器を使用し、窓の下に投げ捨てるわりに、階下の水洗トイレのある所へ流しに行

28) 講座・比較文化第3巻, *ibid.*, pp. 278 - 281参照。

29) d'Haucourt (大島誠訳) 『中世ヨーロッパの生活』白水社, 1979, p.35.

30) 講座・比較文化第3巻, *ibid.*, pp.281 - 282参照。

31) 講座・比較文化第3巻, *ibid.*, p. 268.

この一つの理由は、借家の割合が80パーセントにも達していることであろう。借家であれば、トイレの設備は家賃の値上げにつながる。バカンスに行く金をためるためにも、家賃の安い所をえらびたがるのがパリ人なのかもしれない。

く。ロンドンも古い家では、この事情はあまり変らないに違いない。

一方、日本では屎尿処理はヨーロッパと比較にならないほど簡単であった。平家が圧倒的で、家の片すみで汲取便所が簡単に設備できたし、内容物も近くの農家がいくらかでも運び出してくれた。生活環境が急流小河川のほとりにひらけた「閉鎖的な三角形」で、古くは汚物はすべて川へ流せばよかった。日本語の「厠」は「川屋」であって、川の上に小屋を作り、それが自然の水洗便所になった。山あり谷ありの大自然が日本人の生活を包みこんで、ふんだんに降る雨は、急流小河川を天然の下水道にかえていたのである。しかも、農耕民族である日本人にとって、屎尿は必ずしも仕末に困る厄介物ではない。田畑の農作物のための貴重な肥料であって、川に流すことさえ惜しまれたのである。麦作農業で屎尿類を肥料として使うこともなく、汲取便所を作っても内容物の仕末に困っていたヨーロッパとは、大きな違いであった。水洗化のおくれの一因もここにある。しかし、だからといって、日本人が非衛生であるとはいえないであろう。むしろ日本人は、古来、繊細な美的感覚をもち、身のまわりを清潔に維持することに関心の強かった民族である。何時の時代をとってみても、農村はおろか都市においてさえ、日本では、ヨーロッパのような糞尿にまみれた不潔さとは無縁であったし、非衛生の伝統もない。

とはいえ、時代が進み、日本人の生活環境も大きく変って、日本の屎尿処理もかつての *merit* が *demerit* になりヨーロッパ型の問題点をもちはじめようになった。近代化の波に流され、日本特有の豊かな自然の浄化力も、今ではほとんど無力であるかのように見える。ヨーロッパ人の視点からは、日本の屎尿処理が完全に時代おくれと映るのも無理ではないかもしれない。しかし、やはり、バキューム・カーの「後進性」を一方的に問題にする前に、自衛のための必然であったヨーロッパの「近代」都市と、理念的要請でしかなかった日本の「近代」都市の、成立条件や形成様態のいちじるしい相違について、あらためて思いをいたさざるをえないのである。